現場レポート

“農と食”北の大地から

連載第39回

グリーンツーリズムの可能性

（その１．酪農家のファームイン）

ルポライター
滝川 康治

来客との交流や担い手の広がり、農場体験に手応え採算面の課題も

農村の自然や文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動の場を提供する「グリーンツーリズム」の取りくみが静かな広がりを見せている。その内容も農業体験や農家レストラン、観光農園、農畜産物の加工体験や手工芸品づくり…と多彩。道内ではまだ数少ない酪農家によるファームイン（農家民宿）の実践例を紹介しながら、今後の可能性や課題を考えてみる。

神奈川県から移り住んで酪農のかたわら馬や羊を飼い、農家民宿（右手のログハウス）をやっている別海町のオシダファーム（写真右）。古い住宅を改造して山奥のファームイン「ぶんちゃんの里」を開業した浜頓別町の小川牧場（左下）

神奈川県から移り住み新天地でファームイン

根室管内別海町の市街地から五キロほどのところで、神奈川県から移り住んだ一家が酪農を営む「オシダファーム」。七十四ヘクタールの広さがある牧場には八十頭近い乳牛のほかに馬や羊などが飼われており、わたしが初めてここを訪れた〇五年夏には牧場内でふ化したタンチョウの声も聞こえた。押田栄司さん（1941年生まれ）、美恵子さん（47年生まれ）夫婦が切り盛りするファームインは、そんな豊かな自然環境のなかにある。

「旅行者の受け入れは、原則として一日一組で五人以内。こうすることでお客さんとわたしたちとのコミュニケーションが図れるようにしています」

と説明する押田さん夫婦。料理は美恵子さん、酪農体験は栄司さん、ベッドメーキングや掃除は二人でこなす。

牧場の経営主は二男の賢二さん（72年生まれ）だが、押田さん夫婦も毎日、牛舎の掃除や牧草の給餌（栄司さん）、子牛の世話（美恵子さん）といった仕事を担当している。栄司さんは牧草の収穫時期、息子とともにトラクターに乗り、作業に汗を流す。宿泊業と牛飼いの〝二足のワラジ〟の生活。旅行客の多くは七～九月に集中するので、夏場は忙しい日々が続くようだ。

移住のきっかけは九六年秋にさかのぼる。「俺が一本立ちするまで十年間、酪農の仕事を手伝ってほしい」――新規就農をめざして町内で研修を積んでいた賢二さんがかけてきた一本の電話に、押田さん夫婦は心を動かされた。

当時の栄司さんは私立高校で生物の教員をやっていた。「定年後は長野県の山の中で自給自足的な暮らしをしようか」と話していた二人は息子の求めに応じることに――。決断はすばやく、翌九七年春には別海町の住人になった。

五年前、根室支庁が主催するグリーンツーリズムの勉強会に美恵子さんが参加したのがきっかけで、B&B（注＝「Bed&Breakfast」の略。旅行者に空いている部屋と朝食を提供して交流する活動）に取りくむ人たちとも出会う。こうした出会いに触発されて、〇二年秋に自宅でB&Bを始めたところ、けっこうお客さんが訪れたという。

教員時代の押田さん宅には、週末になると教え子たちがやってきたり、ソフトボール仲間の飲み会もよく行なわれた。二人とも、いろんな人と交流することを苦にしないタイプなので、新天地でのグリーンツーリズムの実践も自然体で取りくめたようだ。

宿泊客の8割は道外からネットワークも広がる

B&Bの活動は楽しいが、宿泊は無料、旅行客がホスト宅に支払う料金は「訪問交流講座」の費用二千円が中心とあって、経済的には報われない。そこで押田さん夫婦は、簡易宿泊所の営業許可を取り、ファームインを開業した。〇四年春のことである。

「グリーンツーリズムを始めたころに農協の役員に主旨を話すと、『そんな（儲からない）ことをやるよりも牛の頭数を増やしたほうがいいよ』と言われたもんです。でも、いまでは、『いい仕事をやってるね』という反応になったし、行政からは補助金も出る。ずいぶん（周囲の意識が）変わったな、と思いますね」

と、笑いながらふり返る栄司さん。

何事にも前向きな美恵子さんは、

「（旅行者を）ただ泊めるだけでなく、（ファームインに対する）きちんと価値観を持って料金をいただく。単なるお客さんじゃなく、家族の一員として受け入れるようにしています」

と接客の基本姿勢を説明する。

宿泊客の八割は道外の人で、家族連れや中高年、若いカップルが目立つという。二年前に『人生の楽園』(テレビ朝日系列)で紹介されたのを覚えていて立ち寄る人も。インターネットで「酪農体験施設」を検索し、メールで宿泊を予約する人が多いらしい。

「ワーキングホリデーでアルゼンチンからやってきた十八歳の青年、『根室に赴任したので、酪農家がどんなことをやっているのか勉強したい』と婚約者と訪れた弁護士、『見識を広げたい』と東北から軽自動車を走らせてきた公務員志望の男性と女子大学生のカップル――そうしたことをめざす若者がいるとわかり、面白かったですよ」

栄司さんはこう言って、さまざまな出会いに手応えを感じている。

首都圏の小学生の身元引受人になって一週間ほど預かり、建物のペンキ塗りやモルタルづくり、畑の草むしりなどを体験させたこともある。

「子どもたち自身がやりたいことを、ここではすべてやらせます。彼らは物事をアレンジして考えることをしないので、『創造性を生かそう』とするわけです。いろんな小学生がやってきますが、仕事のやり方を教えるとすぐに覚えますね」(栄司さん)

根室管内のファームインは、現時点ではオシダファームだけ。全道的にも、酪農家が営業するファームインはまだ十軒にも満たない。それだけに、生き物にも触れることができる畜産分野のグリーンツーリズムは、まだまだ多くの可能性を秘めている。

別海町グリーンツーリズムネットワーク(奥山秀助代表)も誕生しており、地域の交流館やゲストハウスをつくった人、リースやお菓子の工房を開業した女性らが集まっている。栄司さんは同ネットの事務局長でもある。十月に美瑛町内で行なわれた「グリーンツーリズム全国大会」にも参加した。

「全国大会の別海分科会では、『自分もファームインの資格を取る』と宣言した役員がいましてね。美瑛までの車中、『いくらなら泊まるか?』と(道外からの)参加者と議論したんです。準備段階で具体的な実践が進み、すごく成果がありました」(栄司さん)

ここ数年の押田さん夫婦の取りくみは、とかく生産拡大に走り、いろんな人々と交流するなかで「農と食」のあり方を見つめる機会が少なかった、この地域に新風を吹き込んでいる。

山村留学をきっかけに古い住宅を改造して開業

根室と同じく、宗谷管内にも酪農家のファームインは、まだ一軒しかない。それは、浜頓別町の南側に広がる豊寒別地区で暮らす小川文夫さん(51年生まれ)、優子さん(58年生まれ)夫婦が九八年から始めた、山奥のファームイン『ぶんちゃんの里』である。

農家の三代目として七〇年代初めに就農した小川さんがグリーンツーリズムに出会うきっかけは、地元の豊寒別小学校の存続を願って企画した山村留学の取りくみだった。

全世帯三十七戸の豊寒別地区の基幹産業は酪農と漁業。同小にはかつて百人を超す児童が在籍したが、校舎の老朽化と児童数の減少によって、廃校の危機に直面した。地域のシンボルでもある学校の存続を願う住民たちは、行政を動かし、十一年前から山村留学事業を手がけ始めた。そうした実践のリーダー的な存在が小川さんである。

事業は軌道に乗り、本年度の児童十七人のうち山村留学生は十三人。この十一年間に全国各地から三十三世帯六十人を受け入れ、うち七世帯が浜頓別に定住するなど成果を上げている。

「(山村留学の家族と交流して)『ここの不便なところがいい』と聞かされ、『俺は最高の場所に住んでいるんだ』と思うようになった」(小川さん)

「こうした環境をもっと生かせないか」と考えていた矢先の九七年、宗谷支庁が開いたグリーンツーリズムの講習会に参加し、「ファームイン」という言葉を知った。小川牧場には研修生が寝泊まりする古い住宅があり、改造して使うことを思い立つ。諸手続きをクリアして、開業にこぎつけたのは翌九八年春のことだった。

「酪農経営の自立が基本」体験交流に力を入れる

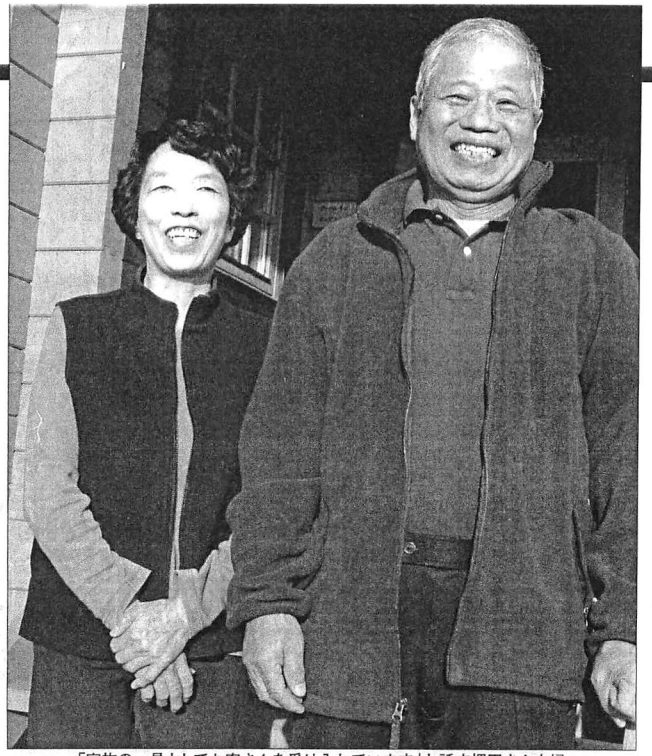
「本業の経営が自立せずにグリーンツーリズムを語ってはいけない」

というのが小川文夫さんの信条。八十ヘクタールの農地で百頭の乳牛を飼い、小川さんと従業員、研修生の三人で切り盛りする。ファームインでは利益を上げようとしていない。

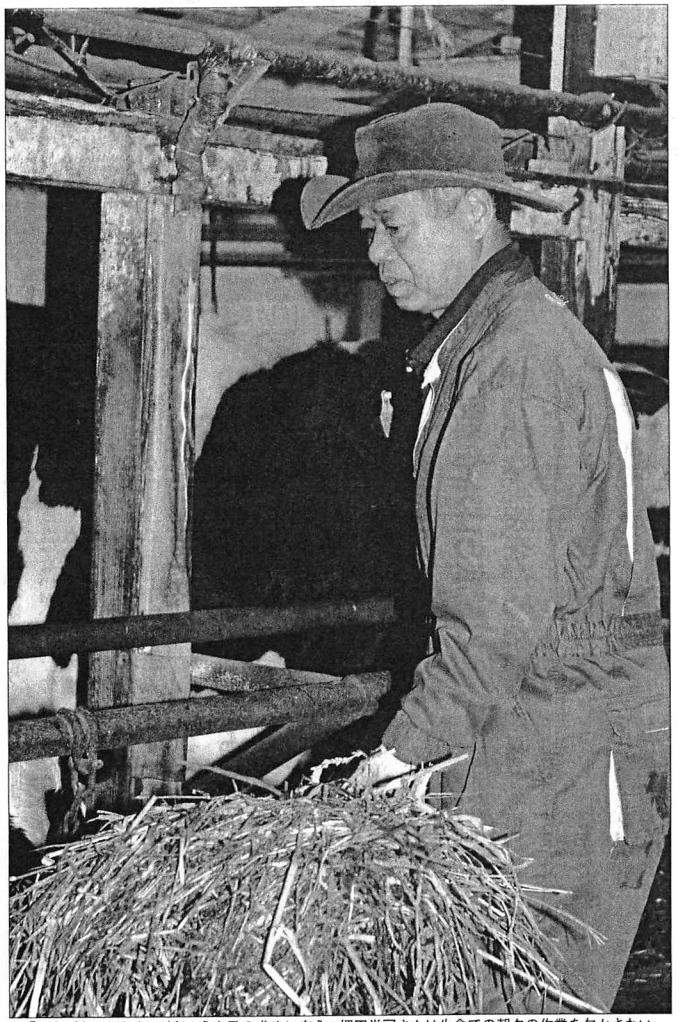
「何人でも訪れてくれる人がいると、それだけで喜んでいます。わたしたちが楽しんでやっているだけですからね。どんどんお客さんがくると、逆に対応しきれずに困る。『損得じゃない』という感覚でやっていますよ」

と、笑顔を見せながら力をこめる。

七人まで利用できる宿泊所や焼肉ハウス、東屋、五右衛門風呂などを整備したほか、飲食業の許可を取って〇五年春には軽食を提供する茶屋『べこっこ』も開業。〇六年春までに牛乳の殺菌施



「家族の一員としてお客さんを受け入れています」と話す押田さん夫婦



「10年手伝ってほしい」という息子の求めに応え、押田栄司さんは牛舎での朝夕の作業を欠かさない

設を造り、訪問客に提供する計画も進行中である。

文夫さんは搾乳などの酪農体験を、町立保育所で保育士をやっている優子さんは勤めのかたわら接客や食事の提供、ホームページの更新を担当する。

㈳中央酪農会議の「酪農教育ファーム」に認証されている『ぶんちゃんの里』では、障害者施設や小規模校の子どもたちも積極的に受け入れ、体験交流に力を入れてきた。一グループ四十分ほどの酪農体験では、牛と生命との関係を伝えることを目玉にしており、酪農の仕事を説明したのち、哺乳や搾乳を経験してもらうのだという。

「昼間は『人間は牛から生命をいただいて生きている』と説明し、夜になって焼肉をやると、子どもたちは深刻そうな表情になりますね。年齢が上の子には、精液が入ったストローを見せて人工授精の話をしたり、子牛が誕生する瞬間の様子を話します。自分の体験をしゃべるだけで感動してくれる。これは牛を飼っていただけでは経験できない喜びですよ」(文夫さん)

牧場のホームページを更新する小川優子さん(左)と責任者の文夫さん

酪農の現場が情操教育の場にもなっているわけだ。体験料金は一グループ五人まで千五百円で、それ以上の人数のときは三百円／人を追加してもらう。決して儲かる仕事ではないが、手応えとやり甲斐を感じているようである。

六年前、農家チーズの工房や体験牧場、平飼いの養鶏、イチゴ狩りなどに取りくむ近隣の町の農場とともに「宗谷クロスロード交流会」をつくり、小川さんは代表をつとめる。スタンプラリーや「ふれあいマーケット」などの活動も続けており、最北の地・宗谷でもグリーンツーリズムの輪が少しずつ広がりを見せている。

年配者や女性の活躍で魅力的な実践を進めたい

二つの事例を紹介したが、あとに続く人たちはそう多くはない。生き物相手の仕事でグリーンツーリズムに投じるだけの労力がない、観光シーズンの夏場は牧草の収穫作業などと重なってしまう…などがその理由だろう。せっかく魅力的な自然環境や生き物とふれあえる恵まれた条件があるのに、もったいない話である。

教員経験があり、いろんな人と交流してきた押田栄司さんは、

「(グリーンツーリズムは)農業の第一線を退いた人や、時間が取れる女性たちが担い手になれる。男がいくら頑張っても料理や掃除などは得意じゃないので、女性が支えている、と僕は思っています。別海町の周辺にはラムサール条約の登録湿地が六カ所もあり、水鳥の宝庫ですよ。山菜も豊富だし、豊かな可能性があります」

と話す。そうした地域の魅力をどう引き出すのかも課題なのだろう。

いくら志があっても、経済的に成り立たなければグリーンツーリズムに希望はもてない、という側面もある。

両者とも宿泊料金は一泊二食付き五千円、仮に数百人が利用してもそう大きな収入にはならない。他地域でも大同小異のようだ。乳牛を一頭飼えば年間五、六十万円の牛乳代金が得られるのに比べると、その差は歴然としている。「ビジネスとしてどう位置づけるか」は将来に向けた大きな課題だ。

「(道内には)おカネをもらってペイすることをめざそうとする人が少なく、そこを脱皮しないとグリーンツーリズムは伸びないのではないか。僕はそうしないけれど、ファームイン専業の人がいてもいいでしょう。そのことで周囲の農家や町が活性化しますよ」

というのが押田さんの見方である。現役の経営主である小川さんは、酪農の自立を優先させ、ファームインは利益を度外視して楽しんできたが、

「自分のなかに〝儲け意識〟がもっと必要なのかもしれない。料金設定とサービス内容の関係をどうするのか、これからの課題でしょうね」

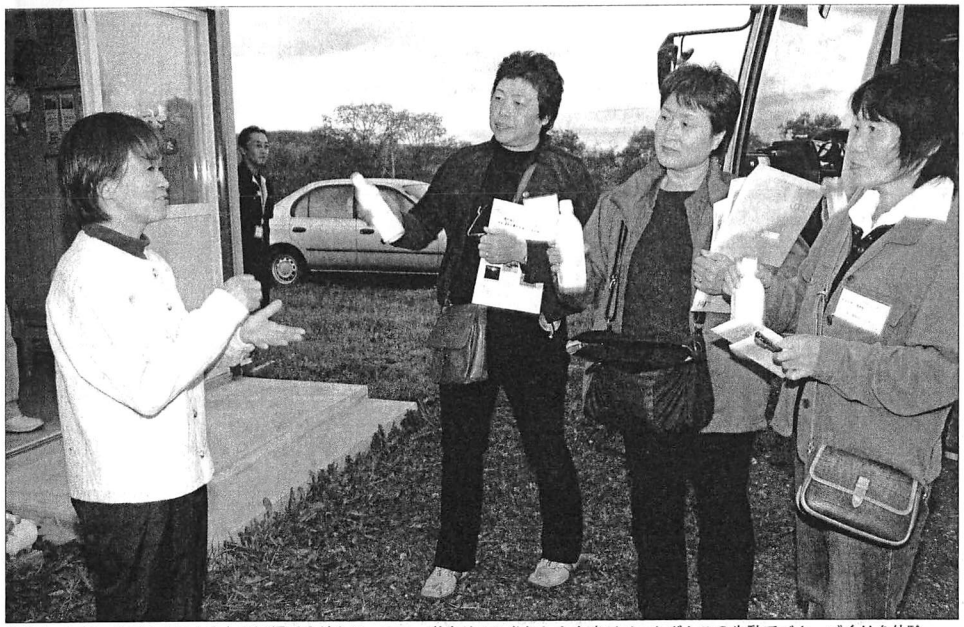
と話す。五年、十年先には酪農経営とグリーンツーリズム部門の比率が変わっているのかもしれない。

わたしが初めてファームインの実践を取材した十数年前も現在も、行政職員らがグリーンツーリズムに熱心な半面、農業関係者の反応はいま一つという傾向が強い。前出の「グリーンツーリズム全国大会」の参加者も、実践者より行政関係者らの姿が目立った。

「農家自身の考え方を変えるのは難しいので、行政や農協がよりグリーンツーリズムの大切さに気づき、ソフト面で協力してくれると発展できるのではないか。一般的な観光に訪れる人は減ったとはいえ、牧場の光景を見てもらうことを(関係者が)もっと考えてもいい。『体験ファーム』は、将来の酪農の理解者を増やすためにも大切なので、経済的な支援があると、もっとやりやすくなると思いますね」

と提言するのは小川さんである。

さまざまな課題をはらみながら、グリーンツーリズムの実践が深まることを期待したいものだ。　(つづく)



「グリーンツーリズム全国大会」の浜頓別分科会の一コマ。道内外から参加した人達がペットボトルの牛乳でバターづくりを体験(05年10月、前田ゆう子さんのチーズ工房で)

■オンダファーム
別海町別海二七五・一一
TEL/FAX 0153 7・5・0523
www.aurens.or.jp/hp/kenzi/default.htm

■山奥のファームイン「ぶんちゃんの里」(小川牧場)
浜頓別町豊寒別
TEL 0163 4・2・4563
FAX 0163 4・2・4577
www1.ocn.ne.jp/~farmin/

現場レポート

“農と食” 北の大地から

連載第40回

グリーンツーリズムの可能性

（その2. 「夢の農村塾」の挑戦）

ルポライター
滝川 康治

増える修学旅行生の農業体験も受け入れて“本物の交流”を実現

北空知の農家有志でつくる「元気村・夢の農村塾」が取りくむ農業体験の受け入れ事業が、年を追うごとに広がりを見せている。体験観光に走らず、少人数で受け入れ、素顔の農家と交流できる企画を用意して、関西などの高校の修学旅行生や札幌圏の中学生の総合学習に人気が高い。「あるがままの農村を体験してもらおう」という活動の歩みや、メンバーたちの心意気を取材した。

あるがままの農村の良さを伝えて確かな手応え

師走も押し迫ったある日、中学・高校生による農業体験を受け入れる活動などを続ける、「元気村・夢の農村塾」（谷口保幸代表）の会合が深川市内で開かれていた。同塾のメンバーは現在、北空知の一市三町で農業を営む四十戸。農閑期に集まって議論し、今後の活動の進め方を詰めようというのである。

農村塾が誕生してから四年目の〇五年は、修学旅行生を中心に道内外から延べ八百八十二人を受け入れ、さまざまな体験メニューを提供した。

各農家は一回に三～五人を受け入れており、回数の多い農場では年間五十人前後に上るところもある。「あるがままの農村を体験してもらう」をモットーにしているが、忙しい農作業の合間を縫っての取りくみだから、いろんな課題をかかえるようだ。

この日は、反省点をふり返り、来年度の見通しについて確認するうちに、「食農教育」が話題にのぼった。

「北空知では年間四十五戸の農家が減っているけれど、一方で食料がどう作られているのか知らない、牛や土にさわったことがない子どもが札幌にもいる。あるフォーラムで、『どんな思いで（体験受け入れを）やっているのか』と聞かれたので、わたしは『食農教育の場なんだ』と説明したんですよ」

新規就農を志す若者たちも応援してきた年配の農家がこう話すと、

「いい作物を育てて収穫し、食べてもらうことを考えているのだから、俺たちのほうは『食農教育』という難しい言葉を使う必要はないんじゃないか」

「食育までは無理でも、農村の良さを伝えることはできる。たとえば、引きこもりの子が農場に来ても自然に溶けこみ、農業体験をすることで学校へ戻っていけるようになった――我々の取りくみの成果だと思うんだ」

などの声が返り、それぞれの体験を交えながら率直に意見を交換しあう。

経営についての話題も行き交う。

「（農業体験は）ビジネスというよりも費用弁償だね。『二十万円の収入（体験料金）があるのでいいな』と思われても、それなりの苦労があるよ」

といった話に笑い声が起こる。

「農家自身、これまでの借入型農業から積立型農業への意識転換が必要だ」

「農水省も最近、環境保全や農村体験を評価するようになったので、ここでの蓄積は大きな力になると思う」

こんな前向きな意見が相次ぐなかで、

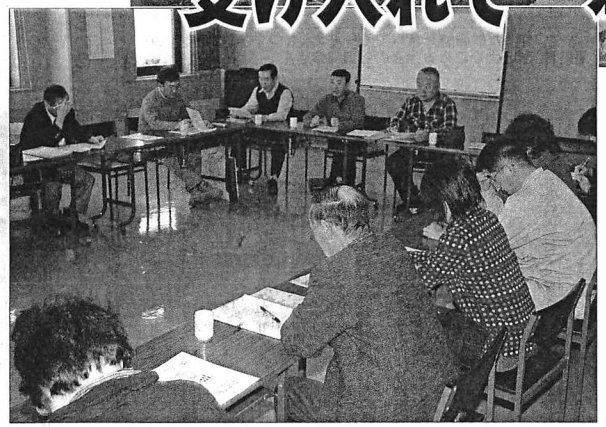
「農場から子どもたちの声が聞こえる、楽しい農業をしなければいかんよね」

という発言に、メンバーたちが大きくうなづく場面もあった。

この日の出席者は、農家と関係機関の職員合わせて二十人ほど。昨今の米価低落によって空知の米どころはきびしい経営状況になっているが、農村塾の人たちは決して〝嘆き節〟を口にしない。それは、これまでの体験交流の実践を通して、確かな手応えを感じて取っているからである

体験観光の道を走らずに増える修学旅行生の訪問

「我々の活動の柱は『農業体験』と『農産物のPR』の二つで、『観光農園とは違う』というスタンスでやってきました。修学旅行生などとは人間として付き合ってきたから、一つの農場で受け入れるのは少人数で心が触れあえる範囲にしている。最終的な目標は、我々の作った農産物を買って、食べてもらえる人をつくることですよ」



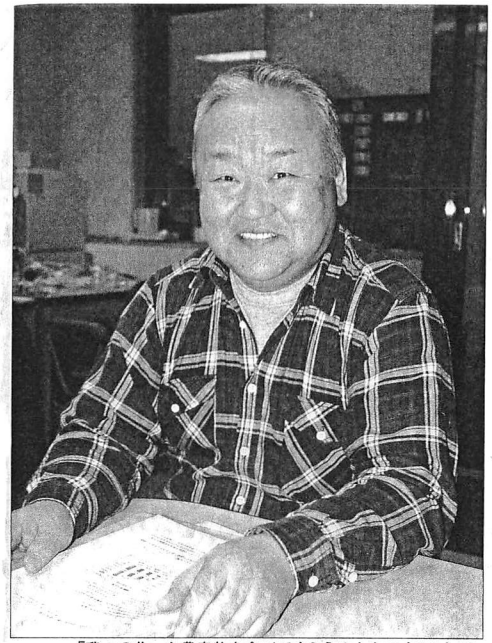
「夢の農村塾」のメンバーのビニールハウスで野菜苗の支柱立て作業を体験する高校生たち（写真右）。素顔の農家と交流できる企画が好評だ（写真提供＝空知北部地区農業改良普及センター）。「農村塾」の会議では、農と食に対する前向きな発言が相次いだ（昨年12月26日、深川市内で）

十四ヘクタールほどの農地で米や花卉、小麦などを作っている、代表の谷口さん（1956年生まれ）は農村塾の目的や特色をこう説明する。

中心になっている農業体験の受け入れ人数は、初年度は二百八十人ほどだったが、年を追って増えており、○六年度は千人前後になりそうだ。全体の六～七割を修学旅行生で占め、札幌市内の中学生の総合学習や農業高校生の実習などが続く。修学旅行を利用した体験交流は関西の高校生が多い。

○二年の発足時には十九戸。それが、この四年間で受け入れ農家は倍増し、深川市のほかに妹背牛町、秩父別町、北竜町へと広がりを見せている。三十代から七十代までのメンバーが手がけている分野は、米や野菜、果樹、花卉、肉牛などと幅広い。

『生きているものの生命をいただくことで我々も元気になれる』という情報発信をめざしたのが農村塾の原点。申し込み人数が増え、学校やインターネット、旅行会社経由の三つで打診してきます。でも、それを流れ作業として受け入れると観光化してしまう。観光ビジネスという位置づけで農業体験に走ってきた先進地が停滞しているのは、子どもたちとのコミュニケーションを図れる範囲で受け入れてこなかったからではないですか。汗を流し、収穫したものに手を加えて食べる――それが食農教育だと思いますね」


「我々の作った農産物を食べてもらえる人をつくることが最終目標」と力をこめる代表の谷口保幸さん

こう力説する谷口さんは、同じ目線で農業を語り合い、メンバーたちに無理がかかる受け入れをせず、長続きする運営を心がけてきた、とふり返った。

受け入れは3～5人／戸 農家の都合に合わせ体験

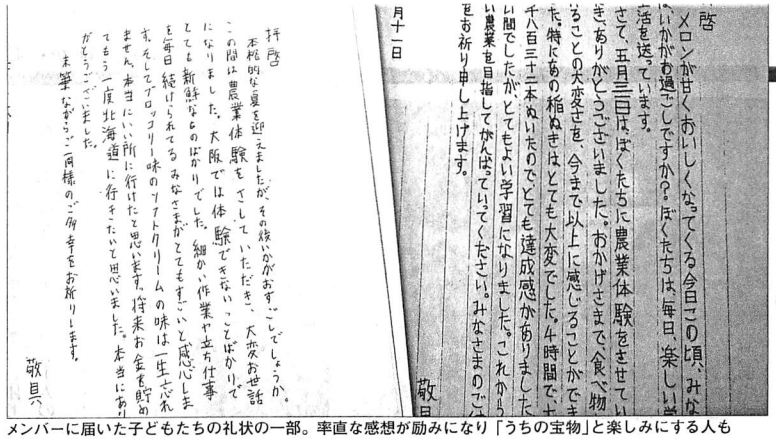
農業・農村体験の大まかな流れは次のようになっている。

学校や旅行会社などからの問い合わせを受け付けるのは、深川市郊外にある都市農村交流センター「アグリ工房まあぶ」（第三セクターが運営）。ここで日程や体験内容、料金などを協議し、農村塾の役員と調整する。行政や農協、道の農業改良普及センターもハード、ソフトの両面で協力してきた。

「農家の女性の意見が反映しやすい体制にしています」と話す普及センターの古家貴美子さん

道内外から訪れた中・高校生たちは、「アグリ工房まあぶ」に集合し、農村塾のメンバーの車に分乗して農場へと向かう。一軒の農家の受け入れは三～五人と少人数にとどめており、万一の事態に備えて傷害保険なども完備した。

各農家で家族の紹介や作物の話、仕事の流れなどの説明を聞いてから、まずは四十分ほど作業する。ひと息ついて移動し、別の作業をやり、収穫物の試食もしてみる――。その日のためにわざわざ準備するのではなく、それぞれの農家の作業に合わせた体験をするように心がけている、という。


拝啓
本格的な夏を迎えましたが、その様いかがおすごしでしょうか。
この間は農業体験をさせていただき、大変お世話になりました。大阪では体験できないことばかりでとても新鮮なものばかりでした。細かい作業や立ち仕事を毎日続けられてるみなさまがとてもすごいと感心します。そしてブロッコリー味のソフトクリームの味は一生忘れません。本当にいい所に行けたと思います。将来お金を貯めてもう一度北海道に行きたいと思いました。本当にありがとうございました。
未筆ながらご一同様のご健幸をお祈りします。
敬具

拝啓
メロンが甘くおいしくなってくる今日この頃、みなさまいかがお過ごしですか？ぼくたちは、毎日、楽しい生活を送っています。
さて、五月三日は、ぼくたちに農業体験をさせていただき、ありがとうございました。おかげさまで、食べ物のことの大変さを、今まで以上に感じることができました。特にあの稲ぬきは、とても大変でした。4時間で、千八百三十二本ぬいたので、とても達成感がありました。短い間でしたが、とてもよい学習になりました。これからも農業を目指してがんばっていってください。みなさまのご健康をお祈り申し上げます。
月十一日
敬具

メンバーに届いた子どもたちの礼状の一部。率直な感想が励みになり「うちの宝物」と楽しみにする人も

直売用の野菜を収穫する、スイカの下に敷物を置く、イチゴやリンゴを摘む、野菜に支柱を立てる、牛の世話をする…など作業は多岐にわたる。

「農業のプロが指導し、料金をいただく」というのが方針の一つ。その体験料金は、半日コースで二千五百円（税抜き）、一日コースは五千円（同）が基本である。

○五年の体験料収入は総額三百万円あまり、多い人では二十万円ほどになった。前出の声のように費用弁償的な色彩が濃いが、農村塾の人たちは、おカネの多寡よりも生徒たちとの交流を楽しみにしているようだ。

もぎたてを食べて感動！ 生徒からの便りは宝物に

「農家の人には『ぜひ、もぎたてを食べさせてください』とお願いするんです。子どもたちは『キュウリってこんなに美味しいんだ』と感動するし、枝豆の収穫では青虫やカエルを見て、鎌を使って、茹でて食べてみて…と何度も喜んでいます。病気がちの子は事前に学校から情報をもらって対応しますが、（農場では）その子たちが一番生き生きとしていることが多いですね。

同じ農家に札幌の中学生が二回訪れたのですが、経営主の話を聞いて具体的に考えるようになり、『農薬をなるべく使わないようになりたい』などと感想を言ったりして成長しています。継続することの大切さを感じました」

と笑顔で話すのは事務局役を担当してきた空知北部地区農業改良普及センター指導主任の古家貴美子さんである。子どもたちから寄せられる礼状や感想文は、メンバーたちの宝物になっているとか。その一端を紹介しておこう。

「…あの稲抜きはとても大変でした。四時間で十万四千八百三十二本ぬいたので、とても達成感がありました…」（札幌の中学生）

「…この体験を終えて、お米が今まで以上においしく感じました…」（同）

「…細かい作業や立ち仕事を毎日続けられているみなさまがとてもすごいと感心します。そしてブロッコリー味のソフトクリームの味は一生忘れません。本当にいい所に行けたと思います…」（大阪の高校生）

こうした反応が返ってくるようになった農村塾の活動は、十一年前に谷口さんらが立ち上げた深川グリーンツーリズム研究会の活動や、若手農家による農場看板の設置（98年）、地元の通信制高校の農業体験受け入れ（99年）などの積み重ねが土台になっている。

（財）日本修学旅行協会が行なっている全国高校アンケートによると、修学旅行の行き先として北海道が一位から三位（00～03年までの調査結果）を占めた。そんな全国的な流れと受け入れ農家とのふれあいを大事にした企画がうまく結びつき、北空知発の取りくみが順調に推移してきたのだろう。

深まる農家の女性の意識 ネットワークも広がる

農村塾の役員たちは一月下旬、総合学習の一環で毎年やってくる札幌の北野台中を訪問し、学校側や生徒たちと交流する。食卓にあがる農産物の生育状況や収穫物の様子を伝える冊子を作る計画も練っている。

空知管内でグリーンツーリズムに取りくむ人たちのネットワーク「そらちDEい～ね」が二年前に発足した。年を追って増える修学旅行生に対して、

農村塾が受け入れ可能な人数には限りがある。「たとえば一学年三百五十人の希望があっても、うちで受け入れられる最大人員は百三十五人／回ほど。そこで、二百人以上の団体は『そらちDEい～ね』と分割して対応しています」（谷口さん）と、ネットワークを活かして調整する場面も出てきた。

この活動の仕掛け人の一人でもある普及センターの古家さんは、農村塾の人たちの意識の深まりをこう見る。

「農業体験は子どもたちが家庭のなかにも入るので、（体験交流の）カギを握る女性の意見が反映しやすい体制にしています。その結果、農家の女性が前面に出て直売所やイチゴ園を開いたり、ブルーベリーやハスカップなどの小果実を作る人が現れました。『農業そのものをPRしなければ…』という気持ちになってきた。地域全体で子どもたちを育てる、環境づくりも積極的に取りくむ――農家自身が変わってきたな、と痛感しています」

畜産農家で子牛の世話――生き物と触れあえる貴重な体験だ
（写真提供＝空知北部地区農業改良普及センター）

師走の会合を取材してみて、メンバーたちの心意気はよく伝わってきた。今後は、いままでに培ったノウハウにいっそう磨きがかかるのだろう。

民泊の実現に向けて準備「本物の交流」へ心新た

これからの取りくみとして、農家に宿泊しながら体験交流を進める構想を練っているが、「地下水を利用している農家には（衛生面などの）規制が多い」（古家さん）といった課題もある。そこで、保健所の担当者から講習を受けたりして、条件が整った農家から簡易宿泊所の営業許可を取得する準備を始めている。これが実現すると、活動は一段と充実してくる。

食育の教材や訪れた子どもたちに送るメッセージを作ったりする部会を創る計画も進めている。農業体験にやってくる中・高校生たちに直接農産物を売りこむようなことは考えていないが、さまざまな活動によって「空知の農産物」をPRしていきたい――というのがメンバーたちの大きな目標である。

十年ほど前に谷口さんとともに農業体験の試みを始め、グリーンツーリズムのアドバイザー役もつとめてきた拓殖大学北海道短大教授の橋本信さん（1949年生まれ）がエールを送る。

「農村塾の人たちは『（訪れる）子どもたちが元気をくれる』と口々に言います。（米価の下落などで大変ななか、農家や農村を）理解してくれる人が増えることが営農の励みになっている。『経済的にどうなのか？』について、成果はまだ出ていませんが、前向きな意欲が大事であり、その先に地域のビジネスとして成り立つ方向性が出てくる、と期待しています」

田園地帯が広がり、観光化されていない北空知の地にしっかり根を張る農村塾の試みは、「農家との本物の交流」を求める風潮のなかで新たな段階を迎えた。全国各地のグリーンツーリズム仲間との交流も進んでいる。中・高校生に続いて、親子連れや団塊の世代の体験交流を模索する動きもある。

肩肘を張らず、自然体で「農と食」の距離を縮めようとする北空知の人たちの挑戦が今年も続く。